

在留外国人を対象とした HIV 検査会の実施

「HIV 検査と医療へのアクセス向上に資する多言語対応モデルの構築に関する研究」班

研究代表者：北島 勉（杏林大学総合政策学部 教授）

研究分担者：沢田 貴志（港町診療所 所長）、

研究分担者：宮首 弘子（杏林大学外国語学部 教授）

研究協力者：Tran Thi Hue（エイズ予防財団リサーチレジデント）

研究要旨

日本においては保健所が HIV 検査を主に提供してきたが、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の流行への対応に追われ、多くの保健所が HIV 検査の停止または縮小せざるを得ない状況にある。COVID-19 流行前から多言語対応可能な HIV 検査の受検機会が限られていた中、在留外国人にとってはますます HIV 検査へのアクセスすることが難しい状況が続いている。そこで、本研究班では、都内の医療機関や NPO と連携をして、外国語 HIV 検査会を開催した。

第 1 回目は 2021 年 11 月 14 日午後 3 時から午後 6 時、第 2 回目は 2022 年 2 月 11 日午後 3 時から午後 5 時に東新宿こころのクリニック（東京都新宿区）において開催した。第 1 回目は来院順に 40 人まで HIV と梅毒の検査を提供し、第 2 回目は事前予約制として 20 人に HIV と梅毒の検査を無料・匿名で提供することを計画した。対応言語は日本語、英語、中国語、ベトナム語とした。検査結果の告知の後に無記名自記式アンケートに回答してもらった。

第 1 回目は 5 人、第 2 回目は 7 人、計 12 人が受検をした。全員男性で、大半が 20 歳代～30 歳代、日本滞在期間が 2 年以上で、常勤の職業に就いていた。そのため、日本語又は英語でコミュニケーションを取ることができ、告知や相談において通訳を必要としたのは 3 人であった。検査会を知ったきっかけとして多かったのは検査会の Facebook やゲイ向けのマッチングアプリに掲載した検査会に関する広告であった。大半が、HIV 感染リスクが高いことや自分の状態を知りたいために検査を受けに来ていた。HIV 陽性者はいなかったが、梅毒陽性者が見つかったため、医療機関への紹介状を出した。検査会に関する満足度は高かった。2 回の検査会の実施にかかった費用は 780,600 円であり、受検者一人当たり 65,050 円であった。

多言語対応可能な HIV 検査受検機会が限られている中、このような検査会を開催する意義は大きいと考えられるが、持続可能なものとしていくためには、計画した受検者数に近い人数に受検してもらうように工夫をすることや、より多くの言語に対応出来るようにするための仕組みを検討していく必要がある。

A. 研究目的

HIV 抗体検査（以下、HIV 検査）は、HIV 感染者を早期に発見し、治療に結びけるといふ HIV 感染者ケアへの入口として、また、HIV の感染を予防する上で重要な役割を担っている。我が国においては、主に保健所が HIV 検査を提供していたが、2020 年に発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19）流行後、COVID-19 感染者とその濃厚接触者への対応に追われ、多くの保健所が HIV 検査の中止や縮小せざるを得ない状況に追い込まれた。その結果、COVID-19 が流行する以前の 2019 年に全国の保健所で実施された HIV 検査は 105,859 件であったのに対し、2020 年 46,901 件、2021 年 34,212 件と、2019 年と比較してそれ

ぞれ 44.3%、32.3%の水準まで減少していた。在留外国人の約 2 割が居住する東京都においては、同時期の検査件数が 14,847 件から 5104 件、3407 件と、それぞれ 34.4%、23.0%まで減少していた¹⁾。東京都特別区の保健所の中には多言語対応の HIV 検査を実施していたところもあったため、在留外国人にとっても HIV 検査にアクセスしづらい状況が継続している。

本研究班としては、都内の保健所等と連携をして HIV 検査の多言語対応化を図るための活動を計画していたが、COVID-19 の流行により実施が困難となった。そのため、在留外国人の HIV 検査へのアクセスを改善するための方策を検討するため、東京都内の医療機関や NPO 等と連携

し、外国語 HIV 検査会を開催した。

B. 研究方法

外国語 HIV 検査会を東新宿こころのクリニックにおいて2回実施した。2回とも英語、中国語、ベトナム語による対応を可能とした。第1回目を2021年11月14日の15時から18時に開催した。検査会では、HIVの迅速検査と梅毒の検査を無料匿名で、来院した順番に最大40人分提供できるようにするとともに、健康や生活に関する相談も受けられる様に準備をした。

検査会当日は、医師2人、看護師1人、臨床検査技師1人、社会福祉士2人、中国語通訳者3人、ベトナム語通訳者1人、受付及び調整員2人、計12人体制で臨んだ。

第2回目は2022年2月11日15時から17時に開催した。第2回目については、20人の事前予約制とした。予約のためのWebサイト(日本語、英語、中国語、ベトナム語対応)を開設した(<https://www.health-kanagawa.net/shinjuku/>)。事前予約をした人には、以下のWebサイト

(https://horseweb.jp/access_to_test_for_hiv_online/rapid_2month.html)にアクセスし、事前にHIV検査に関する説明を読んで来ることを依頼した。

当日は医師2人、看護師1人、臨床検査技師1人、社会福祉士2人、中国語通訳者1人、ベトナム語通訳者1人(オンライン対応)、受付及び調整員2人、計10人体制で臨んだ。

第2回目の検査が実施された週は、都内で連日1万人を超える新型コロナウイルス陽性者数が報告されていた。クリニックは換気が行われていたが、受検者が密集してしまうことを避けるため、採血後、受検者におよその告知時間を伝え、それまでにクリニックに戻って来てもらうように依頼した。

第1回目と第2回目の両日とも検査の流れは、受付、採血、医師による告知とポストカウンセリング、告知前後に社会福祉士との相談(希望者のみ)、検査会に関するアンケートへの回答依頼で、一人につき概ね40分から1時間を要した。第1回目においては、採血後に必要に応じて上述したHIV検査に関する説明を多言語で掲載しているWebサイトを紹介して、読んでもらった。

第1回目の検査会ではイムノクロマトグラフィ(IC)法によりHIV検査を行い、検査結果が陽性又は判定保留の場合は医療機関への紹介状を渡すこととした。第2回目の検査会では、IC法の結果が陽性または判定保留の場合はGeenius HIV 1/2キット(バイオ・ラッド・ラボラトリーズ株式会社)を使い確定診断をし、陽性の場合

医療機関への紹介状を渡すこととした。梅毒についてはTPAb法(アボット社 ダイナスクリーン™ TPAb)とRPR法(積水メディカル株式会社 RPRテスト“三光”)により検査を実施し、陽性の場合は医療機関への紹介状を受検者に渡すこととした。

外国語 HIV 検査会の実施に先立ち、検査会用の

Facebook ページ

(<https://www.facebook.com/groups/998205400981224>)を開設し、日本語、英語、中国語、ベトナム語で検査会の告知を行った。また、ゲイ向けアプリを運営しているBlueD Japan株式会社の協力を得て、検査実施日の約10日前から、アプリに検査会に関するバナーを掲示した。また、ゲイ向けアプリを運営している9monsterにおける2週間のバナー広告、HIV検査相談マップでの検査情報掲載、都内の在留外国人のネットワーク(Tokyo Expat Network)への投稿、都内の保健所やNPO、台湾、ベトナム、タイのNGOへの情報拡散依頼を行った。第2回目の検査会の広報においては、Pre-exposure Prophylaxis(PrEP)に関する相談をすることも可能である旨を記載した。

告知後のアンケートでは受検者の基本属性(性別、年齢層、居住地域、職業、国籍、日本滞在期間)、検査会をしたきっかけ、HIV検査受検経験、HIVを受検する理由、検査会に関する満足度について聞いた。アンケートは日本語、英語、中国語、ベトナム語版を用意した。

(倫理面への配慮)

本研究の実施に関し、研究代表者が所属する杏林大学大学院国際協力研究科の研究倫理委員会より承認を得た。

C. 研究結果

第1回目の検査会では5人が来院した。2回目の検査会の事前予約では20人の枠が全て埋まったが、当日来院したのは8人であった。そのうちの一人が検査結果を聞きにクリニックに戻って来なかったため分析から除外した。

分析対象者12人の基本属性を表1に示した。全員が男性、半数が20~29歳で東京都23区内に住んでおり、11人が常勤の勤務者、国籍はベトナムが最も多く4人、日本滞在期間は11人が2年以上であった。

HIV検査会については、検査会のFacebook、9monster、BlueDで知ったと回答した者がそれぞれ3人であった(表2)。今回が初めてのHIV検査だったのが7人と最も多かった。受検経験者のうち、前回受けたのが2~6ヶ月前、1~2年前がそれぞれ2人であった(表3)。

今回検査を受けたきっかけを聞いたところ(複数回答)、

「HIVに感染する可能性があるから」と「単に自分の状態を知りたいから」がそれぞれ7人であった。

第1回目の検査会では健康や生活全般に関する相談を希望する者はいなかったが、医師が検査結果を告知する際に、通訳を希望した者が1人いた。告知の際に、PrEPに関する質問をした者が3人いた。第2回目の検査会ではPrEPに関する相談をした者が6人いた。

今回の受検者にはHIV陽性者はいなかった。2回目の検査会では判定保留が1件出たが、Geenius HIV1/2キットによる検査結果は陰性であった。梅毒については1件陽性があり、医師により医療機関への紹介を行った。

表1. 受検者の基本属性

属性	人
性別 男性	12
女性	0
年齢層 20-29歳	6
30-39歳	5
40-49歳	1
居住地 東京23区	6
東京都下	2
神奈川県	2
埼玉県	1
千葉県	1
職業 常勤の勤務者	11
学生	1
国籍 中国	2
ベトナム	4
韓国	1
台湾	1
インドネシア	1
フィリピン	1
日本	1
日本滞在期間 6か月～1年未満	1
2年以上	11

表2 検査会を知ったきっかけ（複数回答）

	人
検査会のFacebook	3
9monster	3
BlueD	3
Tokyo Expat Network	1
友人	1
HIV検査相談マップ	1

その他	2
-----	---

表3 HIV検査の受検経験

	人
HIV検査受検経験 初回	7
2回目	1
3～5回	3
6回以上	1
前回受検した時期	
2～6か月前	2
6か月～1年前	1
1年～3年前	2

表4. 今回検査を受けた理由（複数回答）

理由	
HIVに感染する可能性があるから	7
単に自分の状態を知りたいから	7
体調の変化があり心配だから	2
結婚するから	2
定期的に受けているから	2

表5 検査会の費用（税込）

	第1回目	第2回目	合計(%)
人件費	133,760	204,640	338,400(43.4)
検査材料	86,350	189,530	275,880(35.3)
管理運営費	77,550	77,770	155,320(19.9)
医療廃棄物	5,500	5,500	11,000(1.4)
合計	303,160	477,440	780,600(100.0)

「スタッフの対応」、「通訳」、「プライバシーの保護」、「話しやすさ」、「待ち時間」に関する満足度を聞いたところ、「待ち時間」以外では全員「満足」という回答であった。「待ち時間」については、第2回目検査会の受検者1人が「やや満足」という回答であった。また、第2回目検査会受検者にはWeb予約について聞いたが、7人全員が「満足」と回答していた。

表5に検査会の費用を示した。2回の検査会の実施費用は687,500円であった。第2回目の検査会に向けて予約のためのWebサイトとバナーの作成をしたため、第1回目と比べて人件費が上昇した。同じく、第2回目ではHIV検査の確定診断をできるようにしたため、検査材料費が高くなった。この費用には、検査会に参加した研究班のメンバー

(医師1人、通訳者2人、受付1人)の費用は計上されていないため、それぞれの職種と同様に謝金を支払うと仮定すると、約13万円が上乘せされることになる。

D. 考察

研究班として初めてのHIV検査会を開催するというのもあり、いかに対象者に検査会に関する情報を届けるかということが課題であった。検査会に関するFacebookページの開設、ゲイアプリでの広告、HIV検査相談マップ、Tokyo Expat Network、国内外のHIVに関する活動をしている団体や個人、在留外国人のネットワーク等々を介して検査会に関する情報拡散を試みた。第1回目の検査会は最大40人に対応できるように準備をしていたが受検者が5人であった。予定人数よりも少なかったが、初回で5人受検者が来たのは悪くない結果だったとも考えられる。5人とも異なる情報源で検査会のことを知ったということであったため、第2回目の検査会についても、同様の情報源を介して告知を行った。また、多くの人の目にとまるように、デザイナーに作成してもらった検査会のバナーを広報に用いた。

1回目の検査会は来院順に検査を提供するという方式をとったが、人数や来院時間、通訳が必要な言語が当日までわからないことから、2回目の検査会については事前予約制とした。20人の予約枠は予約開始後約2週間で一杯になったが、来院したのは8人であった。今回は予約開始を検査日の約1か月前から行ったため、予約をしたことを忘れてしまったり、別の用事が入ってしまい来院しなかったことが考えられる。検査会に関する告知は早めに出すとしても予約開始は検査日の2週間前程度から始めるなど、当日のキャンセルを少なくする方法や、あらかじめ当日キャンセルを想定して対応出来る範囲内で多めに予約をとるなどの方策を検討する必要がある。

分析対象者12人全員が男性で、大半が常勤の勤務者で日本での滞在期間が2年以上であった。そのため、大半が日本語でコミュニケーションを取ることができ、告知や相談の際に通訳を希望したのは3人と少なかった。COVID-19流行後、外国人の入国が制限されていることも関連していると考えられる。今後、入国規制が緩和されるに伴い、より滞在期間が短く、日本語でのコミュニケーションが取りづらい受検希望者の割合が高くなる可能性がある。

12人中7人が初めてのHIV検査ということであった。2回以上の受検経験がある5人のうち3人は過去1年間に前回の検査を受検していた。受検理由としては、「HIVに感染する可能性がある」、「自分の状態を知りたい」が最も多かった。COVID-19流行前から多言語対応可能な検査機

会は限られていた中、COVID-19流行の影響でHIV検査を受検する機会が減ってしまい、受検したくてもできない人が潜在的に多いことが予想される。感染リスクが高いと感じている人が定期的に受検できる機会を提供し、その情報が届くようにすることが重要である。

PrEPに対する関心は高く、受検者の大半がPrEPについて質問または相談をしていた。受検者の多くがHIV感染リスクが高いと感じているため、HIV検査会の中でPrEPの情報を提供していくことは有意義であると考えられる。

今回実施した2回の検査会では、HIVと梅毒の検査を合計60人分提供できるように計画をしたが、結果の告知までできたのは12人であった。検査会実施にかかった費用は約780,000円で、受検者一人当たり65,000円であり、より効率的に検査を実施する方策を検討する必要がある。検査会を定期的に行うのであれば、検査キットの費用を抑えることは可能である。また、計画した検査提供数に近い受検者を集めることが必要である。2回目の検査会ではHIV感染の確定診断までできるように20人分の検査キットを準備した。その場で確定診断ができると、外部の検査機関に検査を依頼し、後日検査結果を伝える必要がなくなり、陽性だった場合に医療機関に紹介することから、受検者と検査を実施している側の両方の負担を軽減できる。今後は、検査会で確定診断までできるようにするためにかかる追加的な費用とそれによってもたらされる便益とを比較していく必要がある。

2回目の検査会では、告知予定時間を1時間以上過ぎてもクリニックに戻って来なかった受検者が1人おり、検査結果を伝えることができなかった。検査を効率的に実施するという観点からも、結果を伝えられないということがないようにするための方策を検討する必要がある。

今回の検査会では対応言語を日本語、英語、中国語、ベトナム語とした。在留外国人の中で人口が最も多いのが中国人で、2番目に多いのがベトナム人であることが中国語とベトナム語を選んだ理由である。受検者の国籍はベトナム4人、中国2人、台湾1人であったが、韓国やインドネシア出身者も受検していた。今後は首都圏の在留外国人の分布をみながら、他の言語による情報提供や通訳活用のあり方についても検討する必要がある。

E. 結論

首都圏の在留外国人を対象とした外国語HIV検査会を2回実施し、12人がHIVと梅毒の検査を受検した。全員が男性で、国籍はベトナムと中国が多く、大半が日本で常勤の勤務者であり、2年以上日本に滞在していた。日本語でのコミュニケーションがとれる人が多く、告知や相談の際

に通訳を必要とした人は3人であった。ほぼ全員が検査会について満足していた。HIV陽性が発見された者はいなかったが、梅毒の検査結果が陽性の者を医療機関につなげることができた。COVID-19流行の影響でHIV検査の受検機会が減少している中で在留外国人を対象に検査機会を提供できたので、意義がある活動であったと考えられる。この活動を継続していくためには、計画していた人数に実際の受検者数を近づけることや、より多くの言語に対応できるような仕組みを検討し、より効率的に運営していくことが求められる。

参考文献

1. エイズ予防情報ネット 日本の状況：エイズ動向委員会 (<https://stopcovid19.metro.tokyo.lg.jp/>)

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

なし

H. 知的所有権の出願・取得状況

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし

3. その他

なし